

岩手県東日本大震災津波復興委員会女性参画推進専門委員会
令和元年度現地調査の概要について

1 目的

女性参画の推進に関する現状や課題を実地に調査し、専門的な見地から復興推進プランの進捗等に関する意見をいただき、「復興推進プラン」の推進に反映させる。

2 実施日

令和元年 11 月 26 日（火） 8:15～18:20

3 調査先

(1) 株式会社おがよし

[相手方] 代表取締役 沼里政彦氏

[内 容] 女性職員の活躍推進に向けた取組状況について

(2) いのちをつなぐ未来館

[相手方] 常駐職員 菊池のどか氏

[内 容] 東日本大震災津波の出来事や教訓の発信について
防災学習について

(3) 藤勇醸造株式会社

[相手方] 専務 小山和宏氏、広報・開発担当 小山明日奈氏

[内 容] 企業で働く女性の活躍推進について
女性に向けた商品の開発について

4 調査者

菅原委員長、手塚委員、平賀委員、村松委員、盛合委員
(委員 5 名)

5 調査概要

(1) 株式会社おがよし

○沼里政彦氏 では、改めましておはようございます。今日は御苦労さまです。

先ほどは、うちの工場の流れを見ていただきました。まず、会社の紹介をいたしますと、震災前から同じことをやっていたのですが、震災後からは、輸出、それから冷凍食品の活発化、そして様々な働き方改革、生産性を追求しながらやってきています。その中において高卒の方も震災後 3 年間続けて入っていただいて、自己都合でやめられた方も何名かおられますけれども、まだ 5 名ぐらいは残っています。

ただ、ここ 2 年、水産加工業に新しく入られる方が急激に減りまして、宮古市内の就職率もかなり落ちています。その中で水産加工業の就職率はかなり低いです。私個人的には、様々な仕事に憧れるとは思いますが、この水産加工業の仕事も考え方によってはおもしろい仕事ではないかなということは重々説明してきました。けれども、どうしても入って 1 年、2 年たつと、他の企業や業種、場所などがよく見えたりしてやめられる方もおりま

した。今残っている従業員さんは、仕事にプライドを持って頑張っているのが現状だと思います。

高卒でのパートタイマーとか、いろんな含みで募集なさっている事業者もあるみたいですが、うちは水産高校さんと提携して、高卒を採用しています。お給料の面などいろんな提示をして、学校からこんな高額な支給は如何なものかと、過去に相談もありました。そうしないと入らないのではないですかと言うと、幾らお金を積んでも入らないものは入らないと言われました。ですから、短大卒ぐらいの給与体系はしいているつもりなのです。ただ、本人が外に出たい、宮古から出たいと言っている、学校側は、地元もいいのだよという説明は一時的にはするのですけれども、最終的には生徒を応援するような形になって、その生徒というロケットがすぐ飛んでいってしまうのです。親御さん、それから本人、学校の燃料で飛んでいってしまう。

私も子供がおりますけれども、親御さん自身が地元の基幹産業をわかっていないと言え失礼ですが、よく理解なさっていないから、どうしても水物を扱うところとかは苦しいのだよと言うのです。だから、本人がやる気があっても、なかなか入りづらいのではないかなと思います。ですから、企業訪問などの学校での就職活動には、父兄同伴が良いと思いますと学校側には伝えております。まず、親御さんにわかってもらわないと子供にも伝わらないと思います。

いろんな食生活の中でも、サケなんかは赤ければサケというイメージですよ。ですから、私も年配者なので、子供のころ、おばあさんとかおじいさんから、これがこうなのだよと教えられて育ってきた人間はわかるのです。今の世代は、そういうのが薄れてきて、若いお母さん、お父さんが子供をいろいろ教育していく中で、親が知らない部分は子供に教えられないわけです。むしろ子供から教えられるような形になってしまうわけですよ。

ですから、就職も食生活もいろんな環境の中で、今後いろんなことを考えていかなければならないのではないかなと思っています。うちでもいろんな案を私が出して、いろんな人材を使って、いろんな指導をしようとしても、それがそのように伝わらないのです。どういうことかといったら、「これだったら生産性悪いんじゃないの。ここをこう切りかえると、もっとよくいくんじゃないの」と強い口調で言うと、それを叱られたというイメージになる。だったら、私は事業主として何にも言えなくなってしまう。でも、結局それを素直に受けとめて、そうですね、わかりました、今後そう努力しましょうとか、努力しますとかという者が出てくると、会社は発展するわけです。だから、いろんな家庭、事業所、この宮古全体の環境、そういったものを含めていろいろ考えていかないと、働き手もこれから長続きしないし、こういう基幹産業には増える見込みはないのではないかなと思うのです。

その点、例えば近隣地域の一部を見てみると、その地域の漁師、生産者の皆さんは固まっているのですよね。だから、後継ぎもいっぱい出てきて、うらやましいのです。でも、この辺は、漁師さんはもうほとんどゼロに近い状態。何で、漁師で残っているかといったら、ウニ漁やアワビ漁など高額な磯漁は活気が有り、現在もまだ組合として残っているような感じでしょう。この辺に行って、釣りをしてお魚を釣ってくるとか、網を仕掛けてお魚をとってくるかというのほとんどない状態です。

先ほど会社内を回ってこられて、第1休憩室、第2休憩室と、大きい小さいは別にして

も分けたというのは、将来的に10代、20代の若い女性を雇用していくに当たって、60歳のおばあちゃんたちとは一緒に話が合わないのだろうなと思ったからです。別に一緒になって悪いと言っているわけではないですよ。苦手な方はこっちにも控室がありますよというわけです。ですから、仕事は一緒だけれど、別に遠慮しなくていいのですよと。そこで休憩室、休憩時間、お昼時間に対しては、ストレスをためないように自分たちで活性化させるように話をして、懇談していいのですよという意味で、始めたものです。

それから、男性用トイレ、女性用トイレ、完全に分離して、大型化しているという中で、人数的に多い部分が最初ですけれども、やはり若い女性、若い男性といった中で、万が一の事故につながらないようにという意味です。この世の中ですから、何があっても不思議はない状況なので、そういったものを未然に防ぐことで、中が変わってくるのではないかなということの意味なのです。

よく若いから力があるとか、歳をとると力が出せないとか歩くのも大変だということにおいて、若い人も歳をとっている人も同じお給料なのですかと疑問を持つ方もいるのです。過去にもいました。私は、その意味はわかりますけれども、全員で仕事をしている以上は、お互いが思いやり、カバーしながら仕事をしていくことが大切なんだと。仕事ができないから、それでいいではなくて、そこはみんなでカバーして仕事をしてもらいたいと思います。そういうふうに誰々が言っているというわけではないけれども、言っている方もやがては歳をとるのですよと。だったら、また同じことの繰り返しになりますよと。女性の方の前で言うのもなんですよけれども、女性の方が3人集まると、3人ともいろいろと言ってグループがしやすい。研修生の皆さんも、グループまではいかなくても、仲が悪いまでいかなくても、仲がいい同士が固まったりとかという、いろんな状況もあります。

そういった中で、我々水産加工業が今の人員を維持していくためには、会社がどう変わるべきか、というのは常々考えてはいるのです。しかし、会社ばかり変わるのではなく、働く人も変わってもらわなければならないと思います。労働者の保護というのはかなり手厚いわけです。我々の保護というのはほとんどないような状態です。いろいろ常識のある従業員の方であれば、いろんな形の中で動くと思うのですけれども、そういう部分に物足りない方は転々と事業所をかえる人たちも結構多いのですよね。最後に行くところはなくなるわけです。ですから、実際問題我々もこの仕事をして、人手は足りないわけです。

宮古市の山本市長さんは、同期で話しやすいことから、「市長、宮古さ就職したら、奨励金ぐらい考えてよ」と言った。そうすると、何年かでもそのお金が目的で宮古に残ってみようと。でも、その何年かが何十年になるかもわかりません。やらなければ全部終わってしまうのですと。

震災後に、復旧、復興ということで、いろんなグループ補助金、水産庁の補助金等々をお世話していただいて、我々事業主としてはすごくありがたい。でも、結論を言いますと、震災前のほうがよかったです。施設が新しいとか大きくなったとか、そういうことではなくて、事業をするに当たっての負荷は大きくなっています。例えば、細かいことを言いますと、前の建物は多少古くても、いろんな経費上、減価償却費とかかからないものがあったわけです。今こういう大きな建物になると、いやが応でもそういうものが覆いかぶさってくるのです。そうすると、震災後いろんなお魚の収穫が減ったり、人手が不足している中で試行錯誤している中で、いろんな経費が発生してしまうと、企業の経営が一段と厳し

くなる。ですから、国の政策で税の面でも減免とかいろんな取り組みをしていますけれども、それだけでは今の状況の中では大変だと思います。

あと何かお聞きしたいことがあれば、女性社員からもお答えしますので、遠慮なく聞いてください。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 申し遅れましたが、ここで女性参画推進専門委員を簡単に御紹介させていただきます。

菅原委員長でございます。

○菅原委員長 菅原です。どうぞよろしくお願いたします。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 手塚委員でございます。

○手塚委員 手塚です。よろしくお願いたします。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 平賀委員でございます。

○平賀委員 平賀でございます。よろしくお願いたします。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 村松委員でございます。

○村松委員 よろしくお願いたします。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 続きまして、県庁復興局からも参っております。復興局長の大槻でございます。

○大槻復興局長 大槻でございます。どうぞよろしくお願いたします。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 副局長の森でございます。

○森復興副局長 森でございます。よろしくお願いたします。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 その他復興局の職員一同でございます。よろしくお願いたします。

委員長、ここからの進行をよろしくお願いたします。

○菅原委員長 委員長の菅原です。今日は本当にお忙しいところ、工場や休憩所の施設など見せていただき、ありがとうございます。

台風19号も大変だったと伺っていますし、宮古と言えばサケで、サケもなかなかならない、盛岡の魚屋でも宮古産のハラコがないというのがすごく寂しい状況だなど思っていました。そういうときに、復興に女性の意見を反映しましょうという女性参画推進専門委員会の現地調査として、視察を引き受けていただいてありがとうございます。

いろいろ見せていただいて、いろいろなことを考えたと思います。いま社長さんから非常に厳しい状況の話をお伺いしましたけれども、改めて皆様からいろいろ質問や意見を伺って、話を深めていきたいと思しますので、よろしくお願いたします。

聞きたいこととかは何かありますか。では、手塚さん。

○手塚委員 今のお話全体に関してなのですけども、先ほど会社がどう変わるべきかを常々お考えだということをおっしゃっていたと思うのですが、震災後8年が経過して、現状の課題は何だと認識をされていて、それに対して変化が必要だと感じているかという、課題観というところを一つ伺いたいです。あと細かい話ですが、社員の数と、そのうち女性の数、事務をされている方と、あと現場で作業をされている方の雇用形態が違うのかというあたりを教えてください。

○沼里政彦氏 まず、最初の質問でございますけれども、震災後いろいろ取り組んできた中で、1つ申し上げれば、まずは会社と社員が意思疎通を図らなければならないと思っ

います。そのためにはどうしたらいいかをいろいろ考えた中で、年度初めに、おがよしパワーアッププロジェクトというのをつくっているのです。それは何かといたら、特に男子従業員、幹部などのある程度の役職のある従業員たちに1年の目標を立ててもらうのです。その目標がどういうことかと思ったら、自分なりの個人の目標、自分は何々に携わっているから、これをこうしていきたい、私はこう変えていきたいという個々の思い、計画を年度初めに会の中で出し合う。私がそれを取りまとめて、みんなに配付する。それを検証することが大事なので、年末に集まって、Aさんはこういう計画、こういう思いでこのプロジェクトの中でこういう案を出しましたが、それはどうだったのですかと。それは、全うしましたとか、まだそこまで行っていませんとか。それは数字の部分でも出しています。例えばそれが50%となったので、来年度は100に近づけるように頑張ると。いろいろそういった協議、会議をまずすることで、みんながわかり合えるのではないかなと思っています。

あと、最近ではいろいろ伝達事項ももっと変えていかなければならない。私がワンマン経営でいろいろ指示しても、Aさんが部下のBさんに、今度はBさんがCさんに、Cさんがみんなに言うというのは、なかなか流れづらいのです。意外と流れやすいように見えるけれども、言った、言わない、話が違う。逆に、私が全員に言うと、私がそれだけで疲れてしまいます。毎日朝礼をしています。朝礼の中でいろいろな従業員に、今日の内容はこうですよというのを説明するために、全員がわかっていないとならないわけですね。そこで、携帯にLINEがあるので、そのLINEにおがよしグループというグループをつかって、私が朝の10分間に1日の流れを全部つくるのです。つくるのはやぶさかではないので、つかって、ボタン1つで全員に行くわけです。そうすると、何人見たかがわかります。誰が見たかまではわからなくても、何人がこれを閲覧したかがわかります。大体グループ全体で私を入れて9人なので。だから、8人が見れば全員見たなと確認できるわけです。事務職にも見てもらっています。それは、生産管理だから事務には関係ないではなく、事務でも代表する方が覚えておいてもらわなければ困るということで、このグループには入ってもらっています。だから、5時半は厳しいでしょうけれども、出勤する前に、あと生産管理は6時までに見れば、もう今日の1日が全部わかるわけです。

それは、生産管理で余り私が過度にやってしまったら、考える力がなくなるのではないかなという面が出てくるわけです。でも、これは、私はこういう商売をやって30年になりますけれども、震災を契機に組み立てを一から発想していかないといけないと思うわけです。今までこうだったからいいのではなくて、原点に戻るべきだなと。当面はこういう流れで全員を指導して、やがてはこういうことをしなくてもおのおのが全部そういうことを逆に私にくれるような組織をつかっていけばいいのかなと。そういうものの積み重ねだと思ふのです。

前は、1週間の生産計画をつかって皆さんに配付してやったのですけれども、このとおり量がない、あと原材料となる原料が少ない。そうすると、仕事が不規則になってくるわけですね。つけ加えて言わせてもらえば、「おがよしさんって、商売って何が柱なんですか」と、よくいろんなところから聞かれるわけ。うちは、これという柱がないわけではない。柱はいっぱいあります。普通のところであれば、イカですよ、サケですよ、何々ですよと、大きな柱を持ってやっている方が多いのですけれども、うちはもう何でも屋です。

やっていないものがないぐらい何でもやっています。ですから、大きな柱も丈夫でいいの
でしょうけれども、それより細くても、柱が10本あったほうが多分機能力はいろんな局面
の中で強みが出てくるのではないかなというのが私の勝手な思いです。例えば今年みたい
にサケ、イカが少ないのだったら、サケとイカだけやっていたら、もうそこで終わりです
よね。だったら、サバもタラもやれるということで、結局生きる方法が幾らかでも出てく
るのです。

タラは、震災間際最高7,000トンまでありました。その7,000トンという数字は、全国
シェアからいったら20%ぐらいなのです。私はこの実績を公表していませんでした。私も
岩手県の輸出促進協議会の会員になっていまして、お米が何トン行ったとか、お酒が何本
行ったとか、いろいろ活性化しています。これだけの数量が行くというのは、本州では今
まで過去に例がないです。このことがJETROさんに情報が入り、統計提出依頼のお話があ
りました。北海道、本州を合わせて、過去は大体5万トンから3万5,000トンぐらいが中
国とか、そういうところに流れていた。ところが、今は原料がなくなってもうその半分も
ないのです。そういう中で、いろんなものを扱っているがゆえに、頼みの綱がいっぱいあ
るわけです。それが1本か2本しかない、綱が切れてしまうと事業が大変になってくる
のではないかと。ただ、そういう何でも屋に対応できる従業員をつくっていく必要があるな
というのは私の考えなのです。

だから、高卒者が来るときは、いろんな服装をして、きれいな仕事をします、それで、
生産加工やりましょうと言いながら、それは半分ですよと正直に言わないとなりません。
後でうそついたことになるので。原料転換みたいな汚い、重いものもやりますよと。ただ
し、給料はこのぐらいあげますよ、どうですかと。そういう面接をして、そこで了解した
人が入ってくるわけです。

それと、いろんな取組の中で岩手県立大学と提携して、人工知能のAIを水産加工業で
も取り入れ可能ではないのかなとここに何度も足を運ばれてきています。先生方がいろい
ろ取り組んで、ではこういう形でいけばいいのではないのというところまでは行ったの
ですけれども、そこから先はお金がかかると言うのです。あなたたちの開発費が国などの
補助金導入で開発した後は、経済産業省の一般企業向けの補助金案件になり、その土台
づくりでうちが施設を提供したり、案を出したりして、ここから先はお金がかかりますで
は納得がいかないと。うちは、そういうものに金を今は使えないので、ではそこで一回休
みまじょうと。そういう形のものも取り組んだりとか、いろいろやっていました。

○**女性社員** 従業員は51人です。男性が17人ぐらいです。今ミャンマーの実習生が6名
来ています。実習生を含めて51人です。

○**沼里政彦氏** 臨時社員は4人。中小企業は、50人以下の従業員の制度になっていま
したので、臨時が入って、51人なのです。

○**手塚委員** 先ほど伺った事務の方と加工にかかわっている方というのは、皆さん正社員
なのですか。

○**女性社員** パートもいます。

○**沼里政彦氏** 厚生年金、社会保険を掛けている時間給の従業員です。あとパートタイム。
それから、高卒者については従業員です。

○**大槻復興局長** 正規職員ということですね。

- 沼里政彦氏 はい。お給料、固定給を出して、年に2回の賞与も出しています。
- 手塚委員 その51人の中に、賞与のある正社員とパートと全部含まれて51人ということですね。
- 沼里政彦氏 そうです。
- 平賀委員 パートの方はどのぐらいいるのですか。
- 沼里政彦氏 パートは、時間給は八百幾らなのですけれども、きちっと年に2回賞与を支給しています。従業員並みではないですが。何十万もやったのではうちは潰れてしまうので、多少のお金を出しています。
- 平賀委員 それで、ミャンマーの方はどういう待遇ですか。
- 沼里政彦氏 同じです。
- 平賀委員 パートですか。
- 沼里政彦氏 はい。
- 平賀委員 日本のパートと同じですか。
- 沼里政彦氏 はい、そう。全く同じです。
- 平賀委員 ちなみに、時間給は800円ぐらいですか。
- 女性社員 790円。
- 沼里政彦氏 でも、研修生の方たちは総支給額だと十六、七万円いっているのではないか。
- 女性社員 そうですね。
- 沼里政彦氏 お母さんたちで十三、四万円。結局海外研修生の場合は働いてお金を稼ぎたいので、いろいろ早出とか残業が多くなっているのです。
- 村松委員 勤務時間は何時から何時ですか。
- 沼里政彦氏 一応8時から5時までですけれども、研修生の場合は、今日は6時からです。
- 村松委員 それは、水揚げがあつて物が入ってくれば早いということとも違うんでしょうか。
- 沼里政彦氏 輸出冷凍品積み込みの補助員みたいな形です。朝6時から大きなトラックに積み込むときの補助員です。冷凍原料の下ろし等の作業をしていただいています。
- それから、ミャンマーの研修生の宿舎、これは整備されております。2階建てで、私のうちのすぐ庭の前に建っていて、入り口にはカメラも整備していますので、管理はしっかりできています。宿舎に関しても、県で補助金とか助成金が出ているが、遅いのです。少し前から出されても、うちは震災で被災して、翌年の4月にはもうできましたから。宿舎も同じようにつくりました。そうでないと実習生を連れてこられないので。そこからいくと、今工場がこう変わってこられてから、例えば喫煙所だとか休憩、シャワー室だとかと、いろいろ補助金が出ていますけれども、何で今なのと、本当にそう感じるわけですよ。
- 村松委員 さかのぼってもらえないのですか。
- 沼里政彦氏 あれは多分できないです。
- 菅原委員長 女性の水産加工業の方たちの働く環境整備に、補助金を県が出しますというの、これからでしたか？
- 大槻復興局長 あります。あるのだけれども、社長がおっしゃるように、出だしが遅れていると私も思います。もっと早くやらなければならなかったのだと思います。

私は去年まで病院をやっていたのですけれども、病院はそういうのは震災前後からもうつくっていました。あそこも女性の職場なので、震災を契機にして、要するに復興のお金が国から来ているというのもあって、やりやすかったのかもかもしれないけれども、もう少し早くてもよかったのだと思います。

○菅原委員長 私もそれに関する新聞を見たときに、県の実施が今頃なのかという思いを持ちました。おがよしさんが先に進まれているのだなどは改めて思いました。

あとは何かないですか。

○平賀委員 パートの方もいらっしゃるのですけれども、従業員も含めて、女性社員の平均勤務継続年数はどのくらいですか。

○沼里政彦氏 今最高で30年ぐらい勤めている人がいる。

○女性社員 長い人は、そうですね。

○沼里政彦氏 私と一緒に入られた方が、年をとられて、退職したいですと一旦退職して、一、二年のアルバイトの仕事をしたいですと、今二、三人残っています。臨時で手伝っています。

○平賀委員 平均すると何年ぐらいお勤めですか。

○沼里政彦氏 18、19、20歳から、30代、40代で、途中で入られた方もおり、いろんな年齢層の方が働いています。20年以上にはなるのではないですか。

○女性社員 平均だと、もっと若い子たちがいるので。多分10年弱だと思います。震災後で一回やめている方もいらっしゃるのです。

○沼里政彦氏 何せ女性の多い職場なので、やめたくなくてもやめたっていう方もいます。だから、それがなければ結構長いと思いますよ。震災のときに、失業給付金を延長しましたが、如何なものかと思います。あれで失業者が力をつけて働く意欲がなくなったんです。震災後、復興大臣がうちに来たときに、厚生労働省と中の安定局と2つあって、それがガラスを隔てて意見が合わないわけです。片方は失業給付、片方は仕事しろと。1つにまとめてから来なさいよと言いたくなってくるのです。だから、例えば市内環境の中で、20代の方がパチンコ屋に行くと昼間からいっぱいいるよと。

○大槻復興局長 そうだったですね。

○沼里政彦氏 こういうことをどうにか変えていかないと、働き手がなくなるのだと。安定局が金をどんどん失業給付金や失業保険を出したりとかしていますよね。宮古の安定所だって、失業給付金もらうための手続のときは人がわっと行きますけれども、あとは閑古鳥状態ですよ。

○大槻復興局長 だから、沿岸で昔から事業所をやっている人たちはよく言うのです。震災とか、何回も経験しているではないですか。だから、津波があった後はとにかく働けないのです。でも、そういうのを聞いたことがあるのですけれども、今回の震災後は、パチンコ屋に行っている人が多いです。

○沼里政彦氏 福島とかについて、いろいろ聞きましたけれども、すごいらしいです。原発のお金がいっぱい入ってきて、お金持ちになって、ふえるだけで減らないのだそうです。

それはともかくとして、いずれにしても市内環境を行政と我々がいろいろ勉強して変えていかないといけない。いつまでもあれがない、これがない、これがだめだ、それだけでは、前に進まないのです。市にもいろいろ提案しているのです。我々企業体は、労働環境

の問題、労働人口の問題にしても、皆さんを集めていろいろ話をするのは結構だけれども、それでは話がまとまらない。いろんなブロック、班に分けて、そこで長を決めて、話をまとめていかなければまとまりませんよと。

○菅原委員長 子育て中の方もいますか。

○女性社員 はい、そうですね。

○菅原委員長 子育て中の方たちは、どんな働き方をしているのでしょうか。子育て中だから働けないのではなくて、少しでも働いてというような形に仕向けていくというのもこれから大切なことなのではないかと思うので教えていただきたい。

○女性社員 いっぱいいるわけではないです。年齢的に子育てが終わった世代の方、もしくは若い方、10代などが多くて、ちょうど間ぐらいの人はそんなにいないのです。ただ、いらっしゃる方は学校の行事があったりとか、子供の病院があったりとか、そういうのはその都度お休みしたり、早退したりしています。

○沼里政彦氏 今臨時で働いている方で、9時から来ている人もいるでしょう。

○女性社員 はい。保育園に送ってから来ています。ここは、もう求人にも出しているのですけれども、時間はお昼までとか、相談でその都度、対応しています。

○菅原委員長 できますよと言っても、なかなか来ないのですよね。

○女性社員 そうですね。誰も来ない。

○菅原委員長 今後は、そのような方々を掘り起こさないと、なかなか厳しいかなと思います。そのような働き方をしている方がいるのであれば、そういう働き方をしている人がいますというアピールをもう少し前面に出していくことも必要かと思います。今家庭の中にいるけれど、家庭から出て、お金も欲しいし、働きたいと思っている方は潜在的には存在しているはずなので、そういう方たちをうまく活用することもお考えになったらいいのではないのかなと思うのです。

○沼里政彦氏 私の知り合いで、中国の大連に友達が1人いるのですけれども、そこは大体従業員が2,000人ぐらいなのです。今も新しい工場ができ上がるところなのですけれども、その工場がここの魚市場を全部合わせても足りないぐらいの大きい複合施設なのです。子育てのそういう保育、託児所も入っているし、それから子供らが料理研究できる場所もあるし、一般市民が行って料理することもできるし、当然工場も稼働して、1階はいろんなテラス、ショッピングとか、そういうのもできると、そういう一つのものになっていると。これは、大連市がかなり力を入れて、そういうものをつくる。そういう面では、かなり認可がおりやすかったのではないのかなと、私はそう見て感じてきたのです。ですから、もし機会があれば、いつでも皆さんをそういうところにアテンドします。本当に盛岡のイオンさんが1つ入るぐらいの大きさです。

ただ、そこまではいなくても、我々も少しはそういうものも考えながら、もしくは頭を切りかえて、100%外人さんというわけにもいかないですけれども、もっと経営者の素質があるのであれば、経営者感覚まで上り詰めていくような流れはあるのです。任せますよと、営業でも何でもやらせてあげたらいいのです。ところが、どうしても高卒という卵を持って、大事に温めてふ化して、これから会社のために頑張ってくれよね、ひよこちゃん。ところが、そのひよこが飛べるようになってほかに飛んでいってしまうと、失礼だけれども、一人前にならない人材を温めて大事にしてきているわけで、うちらもかなりの経

費がかかってきます。いきなり来たからって、ああいう簡単な仕事は最初しません。最初は大変にしてきましたから。仕事を全部覚えてきてから、ではみんなと一緒にになりましょうねと。あなたたちはもうプロだよということで、そういう形をとってきた。

でも、なかなか今の若い世代の人たちはわからない、と言ってしまっただめなのですから、そこをどうにか変えていかないと。

○手塚委員 逆に、高卒以外の採用というのはもっと難しいのですか。

○沼里政彦氏 養護施設、身障者の方とか、いろんな障がいがある方たちも含めて、いろいろ取組はやってきました。でも、なかなか難しいですよ。高卒の実習もうちでやっていましたし、何度もやっていますし、高校生の実習もやって、野外実習も何日かやっています。だから、そういう障がい者的な人も入れて、何日も仕事してもらったりして取り組んできましたけれども、正直言って難しい。

○村松委員 大事に育てて、今も一生懸命仕事をしている女性の従業員の方というのは、どういうことにやりがいとか働きがいを感じているようですか。

○沼里政彦氏 いろいろ分散して仕事をしているので、自分たちが仕事をしているテリトリーにおいて、若い人間にここを頼むよとすると、そこが自分たちのお城になるわけです。そうすると、そこではやりがいがあると思うのです。自分たちが主導権を握れるから。でも、そこに年を召した方が入って行って、何々ちゃん、こうではないの、こういう汚かったらだめだよとかと注意が入ると、素直に済みませんでした、これから気をつけます、こうしますというところになるまでが時間がかかるのではないかと。その段階に早く行けるように、会社側が何かを変えてあげないと。余りダイレクトに言うてしまうと今の人は、やめたらもう決着するのかなみたいな感じのところがありますので。

○女性社員 上司の人たちが見て、仕事になれてきたら、新たな仕事、新たな場所、ポジションを与えるような感じで、一つずつステップアップできるようにはなっていると思います。働いているほうで見れば、一番はお金だと思いますが。高校卒業してすぐおがよしに入社して、1年以内に自分も車の免許を取ったから、新しい車が欲しいというので、1年お金をためて車を買ってと。それが会社とは別に、プライベートでのモチベーションになっている、そういうのはあると思います。次は何、次は何みたいなプライベートの部分で、そのために仕事も頑張りますよという人は多いと思います。

○菅原委員長 いろいろ多様な話題ですね。

○沼里政彦氏 面接も結構苦労しているのですよ。これは、海外研修生、実習生の面接も含めて、余りオーバーに言うてしまうと、そこで拒絶されてしまう。かといって、余りいい話をすると、後で大変になるわけです。あと、特に若ければ若いほど、この人はすぐ売れていくのかな、売れそうもないのかなということを考えています。本当はよくないのですけれども、長く仕事をしてもらいたいと思っているので。

面接ではいろんな意味で苦労します。正直言って、男性では女性は見抜けないです。女性のほうは女性の方をお願いしている。

○菅原委員長 これからは、ずっと働いていただくというのを前提に物を考えていただかないといけない時代だと思います。おがよしさんにいらっしゃる方のように、ここにいる、ステップアップしていけるというのをしっかり見せて、地元に残ると、残っていいことがいっぱいあるというのを見せる、そういうのをぜひ頑張ってもらいたいなと思

ます。子育て中の方も、何もやめなくてできる会社が地元にあるのだということが残って
いくことにつながるのではないかなと思うので。

○沼里政彦氏　うちは1日2時間でもいいのです。その2時間の人が10人いたら掛ける幾
らなのですから。

○菅原委員長　そういう働き方も柔軟にできるところも含めて、女性の力が水産加工業に
はとても重要なのだと思うところがもう浸透できる何かがあればいいですね。

○平賀委員　今お話を伺っていて、とてもよく考えられて、よくやっぴらっしゃるなど
思うのです。それで、会社の目標、今年はどういうこと、ここまで行くよという会社の目
標と、個人が持っている、自分はどうしたいかという目標とも重ね合わせができればいい
なと思います。会社がこう思っているなら、私はこの辺でこういうことをこう頑張ってみ
ようという、それが一致してくると一体感が出てきて、やめたくないという気持ちになる
のかなと思うのです。

男性でも同じなのかもしれませんが、女の人たちが仕事を続けやすいと感じるのは、
その会社の中で働いている場所の人間関係なのですよ。不愉快な思いをして働きた
くないというのはあるので、ここにいて楽しいとか、生きがいがあるとか、子育てしやす
いとか、そういうことが見える形で示されてくると続くのかなと。

それは、外国人の場合と同じ。多分外国人の場合は、お金が大事だと思うのですけれど
も、ここで働いて、自分のふるさとお金を送金できる喜びというので頑張っているのだ
と思うのです。だから、その辺の目標は、多分働いている若い女性も同じなのかもしれな
いから。

○沼里政彦氏　全員が家族になるべきです。家族に近い状態になれば、私はもっともっ
いい環境、それから仕事の面での生産性、いろんなものがついてくると思うのです。ただ、
社員が50人いて、40人は家族だけでも、10人は他人という状況はダメだと思います。
どうしても避けては通れない部分はあるとは思っているのですけれども、そこは常に努力してい
くしかないですよ。

○菅原委員長　そろそろ時間ですか。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長　よろしいでしょうか。

○菅原委員長　話が充分発散してしまいましたけれども、水産加工業の女性の働き方や、
高卒の方たちの定着についても、私たちもさらにしっかりと考えていかなければいけない
と改めて思いました。どうもありがとうございました。

○沼里政彦氏　いいえ、かえっていろんなことを教えていただきました。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長　それでは、こちらでの意見交換会を終了させてい
ただきます。沼里社長さん、本当にありがとうございました。



(2) いのちをつなぐ未来館

○菅原委員長 菊池さんから、体験に基づいたお話をお伺いしましたがけれども、皆さんから何か質問はないですか。

普通の学校だと避難訓練は、年に1回という感じなのですが、釜石東中学校は、避難訓練を随分して実施していたという話ですけれども、何回ぐらいやっていたのですか。

○菊池のどか氏 津波に対して年に2回、あとは火災とか、それぞれ種類によっていろいろあったので、それが多分年に1回ずつある形でした。

○菅原委員長 では、二、三カ月に一度ぐらいは、とにかく逃げようといったことを繰り返して、1年生から3年生までそれを毎年実施しているということですか。

○菊池のどか氏 はい、そうですね。

○菅原委員長 それだけやれば、身につくのでしょうか。年に1回の避難訓練で身につかないと思いますものね。

○平賀委員 忘れてしまうよね。

○菊池のどか氏 あとは、避難訓練も突然起きるといような状況だったので、常にいつなのだろうという状況でした。

○平賀委員 予告なしね。

○菅原委員長 予告なしですよ。

○菊池のどか氏 予告なしです。年に2回ではあるけれども、常に警戒しているというか、そういう感じではありました。

○菅原委員長 「釜石の奇跡」という話をよく聞きますが、奇跡は簡単に起きるわけではなくて、準備があって、さらに条件が整わないと奇跡は起きないだろうと思っていました。私は今日話を聞いていても、しっかりとした準備があったからこそ奇跡が起きてみんなが助かったのだなど、改めて思いました。

○村松委員 菊池のどかさんのように、みずから体験をして、そして今は語れる状態になっているのですよね。

○菊池のどか氏 はい。

○村松委員 読むことよりもとにかく体験した人の言葉というのは感じるものがすごく大きいのですが、この後菊池のどかさんと同じように語り続け、そのほかに同じような役目をする人たちというのは、この後もつないでいくことはどうしていけばいいだろうと思ったのですが。

○菊池のどか氏 まず、語り部といいますか、こういうのを仕事にするとは最初思っていなくて、もともと私自身は東中学校卒業生の中でも、家もあるし、親も大丈夫だったし、すごく恵まれたほうにいて、沿岸部の家をなくした子たちが苦しんでいて、話せなくて、でも話さないといけなくて、苦しみを続けていて、そういう子たちのかわりにやっていたというのが一番大きく、最初に語り部を始めたきっかけです。この語り部をしていく中で、苦しみを続けている人たちの言葉を拾うということはすごく難しいことだけれども、これからしていきたいなと思っています。実際私自身も毎日話すということが結構大変ではあるのですけれども。

○村松委員 そうだね。フラッシュバックもするものね。

○菊池のどか氏　そうですね。仕事だと思って頑張っているところもあるにはあるのですが、この先多分自分の経験自体が今すごく客観的なものというか、本当に自分が体験したのだろうかというくらいのレベルになってきていて。なので、これから先、それがまたフラッシュバックして戻ってくるのか、このまま完全に客観的な状況になるのかはわからないですし、それによって今後の動きというのも変わってくると思います。でも、話せる状況にある子、話したい、伝えたいと思っている子たちがこれからは話せるように、そういう場をまずつくれるように動いていきたいなと思っています。

○村松委員　当時はわからなくても、今はお子さんもいるから、当時小さいお子さんがいたお母さんの気持ちもまた別な立場で、子育てをしながらこうだったのかな、きつこうだったのだろうかと思うこともあるのでしょうかね。

○菊池のどか氏　そうですね。自分に子供ができたからというのはあるかないかはわからないというか、多分すごく考えられる方はどういう状況でも考えられたのだろうかなどは思うのですが、私自身は余り周りのことを気にするタイプではなかったし、気にできる余裕もなかったのも、そこはうまくできなかつたなというのがあるのです。けれども、子供ができてみて、そういうときに子供を抱えて、子供の避難用具を抱えたら、自分のものが持てないのです。どうしようという状況で、その当時車もなかったのも、もう家出られないというような状況になりました。そういうような状況で頼れる人も近くにいないで、どうしたらいいのだろうかという状況だったのがあって、備蓄のところに子供用セットみたいなものが入っていればいいなと、うれしいなと思ったりしました。

○村松委員　それはこれからも生かせるよね。

○菊池のどか氏　そうですね。

○村松委員　そういったことはね。

○菊池のどか氏　この前、台風の被害のときに、自分も避難所に行って、実は子供だけではなくて、うちに高齢の祖母がいて、最近認知症なのかなというところが出てきて、子供だけではなくてそっちも大変でした。家族は姉と母、そして父がいるのですけれども、父は、仕事が終わってから避難所に来る形だったので、母と私と姉がいても、子供1人と祖母を見るというのは結構大変なのだなとすごく思いました。周りへの気を使うというのが一番でした。タブレットで映像を見せていたというのがあったのですけれども、そのタブレットもいつ充電切れるかというのもあったので、避難が終わって、家に戻ればいいのかとすごく思ったのを覚えています。

○平賀委員　4月の半ばぐらいか、当時釜石一中跡、釜石一中がもう廃校になることになって、あいている校舎に避難している子たちがたくさんいたのですよね。それで、そこに支援に何回も入ったのですけれども、言葉は悪いのですけれども、その避難所が物すごくひどかったのです。それで、あの避難所は段ボールで仕切ることも許されなかったのです。ここにいる人はみんな同じなのだから、家族なのだから、目隠しするなというリーダーの一声で目隠しができなかったのです。それと、体育館のトイレで、和式トイレしかなくて、お年寄りが使えないということで、それで水を飲むとトイレに行きたくなるから、お水を控えるということがあったりして、とても大変だったのです。だから、避難当日の大変さもあるけれども、避難した後の避難所での大変さ、それからその後でみんな仮設住宅に移ったように記憶しているのです。

○菊池のどか氏 そうですね。

○平賀委員 ええ、そうでしたね。その後、今度假設住宅でみんながばらばらになってしまった後での体験とか、それぞれの場面で大変な状況が違っていたので、そういうことの記録みたいなものもあるといいと思います。だから、そうするとその後で今度そういうことが起こったときに避難所はどうしたらいいのか、仮設住宅はどうあったらいいのかという参考になると思うので、そういうことについても、もしできたら聞き取りというか、記録をしておいていただけるといいかなと思いました。

○菊池のどか氏 ありがとうございます。

○手塚委員 避難のことに限らず、自分の子供だったり、それぐらいの世代、これからの世代に一番伝えておきたいと思うことはどういうことですか。

○菊池のどか氏 本当に自分の子供だったら、周りの人は置いていけと思うと思います。私は私で逃げるから、子供も子供で逃げろと、大きくなってきたら伝えたいというのがあります。あとは震災があって、15歳だったので、子供でもない、大人でもない微妙な時期に体験したというのものもあるけれども、なかなか思うように生きてこられなかった部分も少なくはないので、震災とかにかかわらず、いつ何が起きて、どう変化して、人生で何が起こるかわからないから、とにかく周りの人に感謝して、今を一生懸命生きろと言いたいです。

○手塚委員 そうですよ。

○平賀委員 本当ね。

○菅原委員長 この前も台風19号がありました。これからは繰り返し災害が起り得る時代、環境になってきているので、そういうことも踏まえつつ、でも経験したことをしっかり次の世代に伝えていただかないと、同じことを繰り返すことになります。東日本大震災のときも、兵庫の震災に学びましょうという話をしていましたが、余り生かされていなかったのではないかと反省がありました。だから、しっかりと振り返ったり、菊池さんのような方が、プレッシャーを与えるつもりはありませんが、伝えるべきところにしっかりと伝えていくということが重要だと思います。それがないと風化していく感じはしますね。特に、実際の避難とか、いろいろなことを体験して、いかにいろいろなところで女性の人たちが苦勞していたかというのは感じてくださっていたと思うので、そういう視点をぜひ残して伝えていただきたいなと思います。15歳のあなたが感じた率直なところは、私たちの年代が感じたこととはまた違った視点が必ずあったと思いますので、期待しています。

○平賀委員 貴重ですよ。

○菅原委員長 貴重な体験だと思います。今日お話を聞いていて、改めてそういう人の視点はとても大切だなと思いました。余り負担に感じない程度に活動していただければと思います。

○菊池のどか氏 ありがとうございます。

○村松委員 発信して、拾っていく人がいればいいですね。

○菅原委員長 そうそう。

○菊池のどか氏 そうですね。

○村松委員 発信してくれたらね。

○菅原委員長 そろそろ時間ですか。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 もっと時間があれば、貴重なお話をさらにいただきたかったところですが、恐縮ですが、時間になりましたので、意見交換はこれで終了とさせていただきます。ありがとうございました。



(3) 藤勇醸造株式会社

○小山和宏氏 まずは、会社の紹介からさせていただきます。創業が明治35年で、釜石市では5本の指に入るくらいの老舗の会社だと思います。味噌の醸造から始めまして、釜石製鉄所の初代所長横山久太郎氏にバックアップしていただいて社屋を建てました。その後、昭和の津波、第二次世界大戦の艦砲射撃ではもう完全に焼け落ちて、その時も新しい社屋を建てるにあたって、製鉄所の方々に応援に来てくださって、そのおかげでここまでやってきました。先ほどもお見せしたとおり、東日本大震災では、会社の周辺では約4m津波がきて、1階がほぼ冠水して、一部2階に残っていたしょうゆが辛うじて残っていて、半年くらいして、その残っているしょうゆでとりあえず再開しました。お店の方は完全に使えなくなって、お店にも50tくらい仕込み中のものがあつたのですが、全部水をかぶってしまった。そういうのがあって、2年くらい経過してお店の仕込みを再開して今日に至るという感じです。かつて釜石市は10万人近く人口があつたんですけれども、年々震災前から減ってきて、それに起因してうちの商品の売り上げも減少傾向になって、それで震災があつて、ガタガタと落ちていきました。一時期復興特需のようなのがあつたんですけれども、やはり減少傾向は続いているという状況です。そこからは、今日の話につながるかと思うのですが、震災後にいろいろ商品開発をするにあたって、うちの娘に手伝ってもらって、商品開発をしてきたという感じです。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 ありがとうございます。続きまして、小山明日奈さんからお話をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

○小山明日奈氏 よろしくお願ひします。女性の商品開発の関係なのですが、私はもともと震災後に釜石にUターンしてきまして、自分が実質震災にかかわっていたというわけではないのですが、気にかかっていたという部分はありました。帰ってきてすぐにうちで働き始めたわけではなくて、一度釜石市のNPO法人でみんなの家・かだつての常駐スタッフをしまして、その後4年前からうちで働き始めました。

みそとしょうゆが、全国的に消費量が減少しているという現状と、震災後につくれないういのが重なって、ちょうど新しい商品をつくろうというところにお手伝いとして最

初入りました。デザインのお手伝いということで、ちょうど新しい商品ができてデザインをどうしようかというところで、全然知識とかそういう技術はなかったのですが、釜石ファンの方とのつながりがあって、バックアップしていただきながら一つ一つ開発をしていくうちにお配りしたリーフレットにも載っているような感じで、どんどん商品がふえていった。最初は創業当時とかからやっているもののデザインから入ったのですが、次の十割糰みそケーキはレシピ開発からかかわって、オリジナルでつくり上げた最初の商品になります。その後、かけしょうゆや甘酒に関しては製造をお願いして、それから、2年前に化粧品のお話をいただいて、初めて食品を越えて化粧品事業を開発して、今年の9月に発売をしました。そちらの商品は、現在岩手県で先行販売をしているのですが、来年には全国発売という感じで、大きく出していく予定になっています。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 それでは、進行は菅原委員長をお願いいたします。

○菅原委員長 それでは、皆さんからいかがでしょうか。何か聞いておきたいこととかありませんか。

東京の釜石ファンの方たちがバックアップしてくださっているということなのですが、それは個人的なつながりなのか、どういう組織になってバックアップ体制ができたのかなど、少し教えてもらいたいと思います。そういう人たちとのつながりはとても大切だと思いますので。

○小山明日奈氏 その方とは、前職のNPOで働いていたときに出会って、もともとは個人的なつながりだったので、うちの商品を手伝ってくださって、釜石市や会社を応援したいというところで商品やデザインの企画を一緒に手伝っていただきました。

○村松委員 商品を開発する中で、明日奈さんが女性だからという部分というのは、何か意識したところがあったのですか。

○小山明日奈氏 もともとうちの既存の商品は、女性が使いたいような商品ではないのかなど。デザインとかも老舗押しの商品で、みそ、しょうゆというのは、そういう老舗感が強いパッケージが多いと思うのですが、自分が使いたいと思うような商品にしようというところから、デザインを意識した商品になっています。

○菅原委員長 みその消費量は、1970年代の半分以下になっているような状態なので、これからどう生き残っていくのかは作戦をしっかりと立てないと難しい業界なのではないかと改めて思っています。そのような状況で、実際に商品を使う女性の視点、立場に立って物をつくるのは、すごく大切なことだと思います。明日奈さんとお父様の間で、伝統的なものをつかっていきたいという思いと、そうではなくて、買ってつかう女性に向けてものをつかっていきたいという思いの葛藤があるのではないかと思います。もちろん、これだけ新しい商品をたくさんつくっているのは、そのような葛藤を乗り越え、お父様の御理解もあってのことだろうとは思いますが、いかがでしょうか。

○小山和宏氏 まずもって既存の商品は、使ってくださるコアなファンがいらっしゃるの、それはいいじゃないと。なので、震災後つくった商品と既存の商品というのは、まるっきり同じ会社とは思えないぐらいデザインが違うのです。もう完全に方向性を分けたというか、そういうイメージです。

おみそは、最近の統計ですと、昨今の発酵食ブームなどで、若干持ち直しているのです。

ずっと下がってきていたのですけれども、ここ二、三年はむしろ若干ふえぎみなのです。粘り気があって使い勝手が悪く、用途が限定されている側面があり、今年そういうのも考えて、みそドレッシングという新しい商品を投入しています。それもデザインも考えてもらったのです。新しい商品、手にとってもらえるデザインは女子受けしないといけない。今テストマーケティングを何回かやっているのですけれども、そこに出しても女性がぱつと手にとってもらえるようなものでないとの厳しい指摘をいただいています、方向性としては間違っていないのかなと思っています。

○平賀委員 私は東京に長いこといたものですから、東京だとおしょうゆというと、ほかにもあることはあるのですけれども、大体がキッコーマンかヤマサなのです。それで、岩手に来て驚いたのが、岩手に実にいっぱいおしょうゆがあるのですよね。私は、こっちのほうが新しいなと思ったのです。東京のように、おしょうゆといたらキッコーマンかヤマサしかないみたいな、押しつけられた感じがとても嫌だなと思っていたので、選べるというのがいいですよ。小さい蔵でいろんなものをつくって、日本酒と同じように、好みでそこを選べるというのがとても新しくいいなと思った。多分これからはそういう好きに選ぶという方向に行くのではないかなと思うのです。ですから、個人の好みをどう開発するかと。

私も藤勇さんのおしょうゆを使って、すごく甘いなと思いました。いろんなお店で食べると、お刺身を食べる時は藤勇さんと断固として言うお店の人もいるのです。それで、私がどうしても言ったら、鮮度のいい魚を食べるときは、藤勇さんのように甘いしょうゆでないだめだと言われたのです。そして、お魚は鮮度が下がってくると甘みが出てくるから、おしょうゆはしょっぱいほうがいい。だから、鮮度がいいときは甘みが少ないから、甘みの強いしょうゆを使うのだよと教わって、なるほど、そうかと思ったのです。

だから、そういう解釈つきというか、それで先ほどどうして甘いのですかと聞いたら、これは釜石製鉄所の所長の好みで甘くしたのだという話があったので、納得しました。だから、そうか、そういうつながりがあったのかと思って、非常におもしろいなと思ったのです。

だから、これからは差別化というか、個別化というか、そういう時代に入っていくのだらうと思うので、そういうところを大事にして、女の人の感覚はすごく大事だなと思ったので、頑張っていただけといいなと思いました。

○村松委員 商品開発をいろいろしていく中で、釜石のファンの皆さん以外に、スタッフの方というのはいらっしゃるのですか。明日奈さんが1人でやっているという感じなのですか。

○小山明日奈氏 社内に3名女性がいます、考えたり、こういうのいいねなど言い合ったりしていますが、決めているのは私です。

○村松委員 その女性も同じぐらいの年代の女性ですか。

○小山明日奈氏 50代です。

○村松委員 上の方ですね。

○小山明日奈氏 そうですね。

○手塚委員 従業員のの方は、全体で何名いらっしゃるのでしょうか。

○小山和宏氏 今は11名です。

- 手塚委員 製造や流通という、そういうことが中心になるのですか。
- 小山和宏氏 製造中心です。製造ばかりやっているわけではなくて、余った時間に配達とかもやっていて、そういうのは流動的です。
- 手塚委員 このうち女性が3名ということ。
- 小山和宏氏 そうです。
- 手塚委員 社員の中では、明日奈さん以外にも若い方もいらっしゃるのですか。
- 小山和宏氏 だんだん高齢化してきていて、30代が1人しかいないのです。明日奈だけ。あとはもう40代後半、50代、そろそろ定年というような感じです。
- 菅原委員長 こういう支援があったらば、もっと事業がうまくいくのではないかとか、何かそういうものはありますか。県庁から職員も来ているので、特に、女性のこういうところを生かすことができるような支援や要望でもいいので、今考えていることはないですか。あれば私たちも意見も言いやすいと思っているのですが、いかがでしょうか。
- 小山明日奈氏 もっと外の世界を見る機会が欲しいなどは思います。日本の中だけでもものをつくるという考えも大事だとは思いますが、世界になるとまた全然事情も違うし、世界を見て、そこから吸収して、違う方向性を学んだりとかできると思います。最近だとデザイン重視もそうですが、エコの時代になって、害になる余計な素材を使いづらくなってきていて、新素材についても考えていかなければいけないのかなと思っています。より広い世界で見て、この商品は本当に価値のあるものなのかということまで考えて開発をしていきたいなと思っています。
- 菅原委員長 勉強会、交流会のようなどころから始まっていけばいいですね。一気に利益につなげることは難しいかもしれませんが。釜石には同じような志を持った方たちの集まり、学ぶ機会というのはあるのですか。
- 小山明日奈氏 女性のということですか。
- 菅原委員長 女性の感性を生かして、何か新しいものをつくっていかうとか勉強しようとかというような勉強会や交流会などはありませんか。
- 手塚委員 内陸で商品の開発とかをされている方が講師で、沿岸何カ所で勉強会をするとかはあつたりします。例えばInstagramの勉強会とかは沿岸何カ所でやったりとか頻繁にあつたりはします。
- 菅原委員長 企業経営者からのお話などの勉強会があるといいですね。経営塾のような勉強会もたくさんあると思いますが、そこでは、別に男女区別する必要もないと思いますが、往々にして女性が少なくて男性が多いのが現状で、女性の参加者がたくさんいてほしいと思うのですけれども、なかなか参加しにくいのではないかと思います。
- 大槻復興局長 震災後に、明日奈さんほどのNPOに所属されていたのですか。
- 小山明日奈氏 アットマークリアスさん。
- 大槻復興局長 そうなのですね。そういうNPOさんが全国から入ってきて、そういう方々のつながりで大企業とのセッションを組んでくれた。だから、そういう中で販路ができたというの、震災後、釜石が一番盛んだったと思います。なので、そういったのがいい影響を与えているのではないかと思います。明日奈さんも釜石に帰ってきたというのは、そういう背景があるのかもしれないけれど。もう内陸ではなく、東京を見なければなりません。センスのあるデザインとかというのは、NPOとかそういう人たちのいろんな

力もあったのではないかなと思っているのです。その中で例えば販路開拓につながったというような話が来たりしたことはあるのですか。全国に打って出るような販路をつくってあげますよというような。

○**小山明日奈氏** そこまではないです。

○**大槻復興局長** ないですか。

○**菅原委員長** 化粧品の話とかは。

○**小山明日奈氏** 化粧品は、共同開発したものを全国に販売するという。

○**小山明日奈氏** 首都圏を中心に販路を持っていますので、そちらで展開できるということです。

○**平賀委員** でも、先ほど東京と言われていましたけれども、もう世界を見なければと思うのです。日本料理は今ブームですよ。というのは、日本料理というのは絶対おしょうゆがないとだめだし、フランス料理でもおしょうゆを使って味つけをしているような時代なので、自信を持ってどんどん出ていって、チャンスだから、もう東京と言わないで、世界を目指したほうがいいのではないかなと思います。ニューヨークなんかでも、日本料理はすごくブームです。そうやって世界に出ていくときには、男の方の感覚よりも女の方の感覚のほうが受けはいいと思うので、その辺自信を持って出ていったらどうかなと思います。海外にいる日本人に向けてPRしてみたらどうでしょうね。欲しいなと思う人はいっぱいいると思うのです。

○**小山明日奈氏** そういう場合、どこにそういうつながりがあるのかというのは、今のところわからないですけども、そこをサポートしていただきたいです。

○**森復興局副局長** 例えば県庁と民間が一緒になっているいわて未来づくり機構というのがあります。年2回の開会だから、被災地の方々と、東京の大手企業の方々が集まっていたいてマッチングするような場をつくっているのです。ですから、そういうところで、こういうことをしたいのだけれどもとやると、必ずつながるわけではないですが、マッチングするケースもあります。そちらも県庁のホームページには載っておりますし、後で御連絡先はお伝えしたいと思います。

○**大槻復興局長** そういう機会は、県庁の未来づくり機構もあるし、それから復興庁そのものもやっているのです。復興庁にもこの間実施していた結いの場というのがあります。大手の企業と地元の企業がマッチングする機会を設けてという形なので、話をするまでだったらリスクはないと思うので、そういう場には御参加になればいいのかなというところでは。

震災後、内陸のスーパーで藤勇さんのしょうゆを結構見ますね。

○**小山和宏氏** こちらの方が向こうに行ったのかなと思います。

○**大槻復興局長** だからなのかな。震災後のほうが、スーパーに並んでいる藤勇さんのしょうゆが多いような気がするのです。

○**平賀委員** そうかもしれない。

○**小山和宏氏** 実際内陸は若干ふえています。

○**大槻復興局長** そうでしょう。

○**小山和宏氏** 逆に、沿岸部は減っていますので、総体的には変わらない。

○**手塚委員** そういうふうに、沿岸に限らず、岩手県内の企業さんは積極的にデザインの

リニューアルだったり、新しいことにチャレンジしたり、商品開発に取り組むような企業がふえるには、どうしたらいいと考えますか。

○**小山明日奈氏** 私個人で言うと、本当に自由にやらせてもらうというのが一番だと思います。

○**手塚委員** そちらはそうですね、確かに。

○**小山明日奈氏** 特に女性だけの商品開発だったというところもポイントなのかもしれないですね。年代の異なる女性の釜石ファンの皆さんは、決め事がすごく早くて、フェイスブックのメッセンジャーでもう全部決めてしまえるので、すごくスピード感を持って取り組んでいっても大丈夫かなと思っています。そういったものを活用するというのが、これから本当に大事なことかなと思っています。

○**菅原委員長** もちろん自分のところの対応が最も大切なところだろうと思いますけれども、ぜひ小山さんのやる気とパワーで、いろいろな人に良い影響を与えて欲しいですね。この地域が一緒にいろいろなことで盛り上がっていけるということがあるのもっといい効果があると思います。小山さん自身ももっとアイデアとか元気が出るのではないかなと思います。そのようなことをサポートできることがないかと思うのですけれどもどうですか。そういう場の設定とかは、県庁は得意ではないですか。

○**伊五澤推進協働担当課長** そういった場いきなり行くのがハードル高いという場合ですと、工業技術センターとかだと商品デザインのお手伝いとかをさせていただくこともできます。あと醸造部もあるので、商品そのものもつくったりしています。

○**菅原委員長** 県の工業技術センターに行ってお話したことはありますか。

○**小山明日奈氏** 私はないと思います。

○**大槻復興局長** 工業技術センターというのも、余りにもコアな感じがする。逆に、学者の先生も含めた緩いつながりというのは、それこそ岩手大学のINSとか、そういうグループもあります。そういったものは、大学の先生方の非常に緩い集まりで、これは日本酒の鷺の尾の社長も入っているのです。そういう中で醸造の関係だけではなくて、先生が知っているつながりでアメーバのように広がっていくので、そういう場を活用されるのもいいと思います。

○**村松委員** 緩いのは大事だよな。

○**小山明日奈氏** 特に地元だと、一回そこに入ってしまうと、何かそこのしきたりみたいに植えつけられるのがすごく嫌で、何も所属したくないなということになってしまっただけ。

○**大槻復興局長** 年に1回か2回飲み会みたいな場があってもいい。それだけで、あとは何するということはない。

○**菅原委員長** INSの中に鷺の尾の社長とかがやっている発酵食品研究会というのがあつた。釜石から共同研究員で行っている澤口さんは知っていますか。岩手大学に行っている澤口さんという女性で。

○**小山明日奈氏** 2年とかの任期で、市から行っている方ですよな。

○**菅原委員長** そうです。ここに来る前に、委員会の現地調査で釜石市に行くという連絡をしたら、返事のメールをもらっているで、INSの研究会等を紹介してもらうように話をしてみたいと思います。つながりが広がるかもしれないですね。

○**村松委員** 人とのつながりだよな。組織につながるというのではなくて、組織を利用し

て、人とつながることができればいいですね。

○小山明日奈氏 はい。

○菅原委員長 ほかにいかがでしょうか。よろしいですか。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 委員の皆様、よろしいでしょうか。

それでは、忙しいところ、本当に小山専務と明日奈さんには貴重なお話をいただきまして、ありがとうございました。

これで、藤勇醸造様との意見交換会は終了とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。



まとめ

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 これでは本日の3カ所の現地の方々との意見交換は終了いたしました。これからは、本日の現地調査を振り返って、全体での意見交換をお願いしたいと思います。

ここからの進行は、菅原委員長によろしくをお願いします。

○菅原委員長 では、取りまとめをしていきたいと思いますが、最初はおがよしさんのところでは、女性の働く環境の整備について、特に、従業員の方たちが快適に活躍できる環境整備等をしていただいているという話を伺ってまいりました。その他も訪問していますので、全体で何か気がついたこと、感想等を、皆さんから一言ずついただくことで、今日は終わりたいと思いますが、よろしいでしょうか。

どなたかからいかがですか。平賀さん、ありますか。

○平賀委員 今日はいろいろとありがとうございました。

おがよしさんで感じたことは、非常に女性を大切にしている会社で、感じがいいなと思いましたが、お話を聞いていると、あそこで子供を産んで育てるという経験が余りないように思いました。ですから、あの会社に入ったら、子育てがとても楽しく、楽にできて、仕事が続けられるという経験をもう少し会社が積んで、それが女性が働きやすい社会づくりにつながっていくのではないかなと思いました。

それで、みんな化粧などを覚えるといなくなるとかいう話、これは確かにそうなのだと思うのです。盛岡でも25歳を過ぎた女の子が急にいなくなると、都会へ行ってしまうというような、そういう風潮はあると思います。でも着実に女性が子育てをしながら働き続けられるという場をふやしていく努力をしていかないと、若い人の定着というのは難しいだろうなと思いますので、あの会社にはそれを積極的に進めていってもらえるようになればいいなと。そのためには、会社だけでは多分無理だろうから、地域、行政として、子育て支援をもう少し強く打ち出していってもらえたらいいのかなと感じました。

それから、いのちをつなぐ未来館で、お話ししましたが、逃げることだけではなくて、逃げた後で気持ちのいい避難所とか仮設住宅で過ごせるようになるかということについても、少し幅が広がってくるといいなと思いました。私も随分、避難所とかに支援に入りましたけれども、私だったら絶対に嫌だなと思うようなことがいっぱいあったのです。だから、そういう悲惨な経験を余りしないで済むようにと思いました。外国の何か災害のときの避難なんかの例をテレビで見ると、もっとすばらしい避難所というのがあったように思うので、そういう研究も進めてもらえればいいなと思いました。

藤勇さんは、おもしろいこと、いいことをいっぱい考えてやっているのだから、自信を持っている人となつながら元気にやってほしいなと思います。

私は、これから先の世界は、発酵の文化とか日本の文化はメインになってくると思うので、それをうまく利用して世界に出ていってもらえたらうれしいなと思います。世界から支援を受けて、釜石が復興していったわけだから、それを解消していつてくれるといいかなと思いました。何か勝手なことばかり言って済みません。

○村松委員 私も田舎で生まれ育って、都会に行きたいと憧れていました。ですから、どうしても一度は外に出てみたいという女性というのは出ることも大事だと思いますし、最初から引きとめるというのは、もしかしたら難しいことなのかなと、自分の経験を振り返

っても思います。小山明日奈さんがふるさとに帰ってきたように、そしておがよしさんのところでも、子育てを自分の生活の拠点を一旦外に出てもまた戻ってきて、ここで子育てをして暮らしていくという基盤をしっかりとつくることができれば、女性がまたそれぞれの場所で地に足をつけて生活をし、そして社会にも参加していけるのかなと感じました。

菊池のどかさんの場合は、大変な経験をし、子育てがあつて地元に残ったのもあるだろうけれども、使命感で地元に残ってくれている。また一生懸命やっているという今の気持ちを、きっと折れそうになるときもあるのではないかなと思うので、女性、男性に限らず、とにかくそういう人たちの思いをすくい取ってあげる機会や、いろんなこんなことをやってみたいという明日奈さんのような思いを何かどこかにつなげてあげる役割ができればいいなと感じました。

○手塚委員 今日ありがとうございます。

3カ所、視察と意見交換をさせていただいて、改めて言うまでもないのですが、復興だったり企業の経営を支えているというのは、人なのだなというのを改めて感じました。

私の場合は、埼玉で生まれ育って、都内の大学にも実家から通うという環境でずっと過ごしてきたので、自分自身の経験と、岩手で、高卒で仕事をし始める心情というのは、リアルにはわからないところがあります。考えてみると、東京や仙台などの都会に出たいという思いを持っている子に、お金や制度を充実させて残ってもらおうというよりは、一回外を見た上で、それでも宮古なり釜石に戻ってきたいと思わせる地域をどうつくっていくかが大事。私はお金とか条件で若い子を残すというのは、長期的に見ても地域のためにも余りよくないというのが常々持論なので、正直その思いを新たにしました。

なので、繰り返しになりますが、いのちをつなぐ未来館で会った菊池のどかさんの場合は、盛岡に進学をして、一回は就職をほかの地域ですするというのも頭には思い描いたようですが、釜石のためになりたいという気持ちで帰ってきたそうです。もしかしたらこの後いろいろフェーズが変わって、もっと広い世界を見たいなということもあるかもしれないですが、また結局折を見て生まれ育った地に戻ってきて、そのときに地域の人たちも温かく迎える体制があるということが何より私は大事だと思います。そういう中から小山明日奈さんみたいな人材も出てくるのではないかなと思います。

小山専務の場合も、実は釜石出身の方ではないのです。気仙沼出身で、SEという異業種の業界を経験されたことで、今のように娘に自由にやらせようという思いに至ったと思う。多様な経験を積んで、また地域に戻れるという人が上の世代にふえてくれば、若い人もそういう選択をしやすくなると思うので、余り画一的ではないキャリアアップが岩手でもできるようになるといいなと思いました。

以上です。

○菅原委員長 いろいろな意見が出ております。ありがとうございます。

改めて、この地域の女性の活躍といってもいろいろなフェーズがあつて、いろいろな支援をまだまだやらなければいけない気がしました。

水産加工業で働き手の確保については、地域で暮らしていて、働ける、働きたいのだけれども、働き場に出てきていない、出てこれない女性がまだまだたくさんいるのではないかと感じていました。そういう人たちをどのように地域の働く場に出してもらうか、その

ためには、例えば保育園などの子育て支援の環境について、地域ぐるみで考えてもらわなければいけないのではないかなと思います。

確か島根県では、シングルマザーに来ていただいて、その人たちが地域の働き手になり、子供もふえている地域があったように思います。そのようなことも事業を元気にしていく一つの形ではないかと思うのです。高卒の人たちをここに置いて何とかしようというところに力を入れるのも大切ではあると思いますが、女性の活躍を支援する取り組みも、みんながハッピーになるような気がしています。新卒の高卒の方たちにも、一旦地域外に出たけれども、また戻ってくることをみんなで支援する地域なのだと思ってもらうことも、今後、働き手の確保につながるのではないかと思います。多様な生き方を支援できる地域であれば、またこの地域に戻ってくるという考えが起きるのではないかと思います。課題は多く、どこから手をつけたらいいのか迷うと思いますが、今述べたことなどに取り組んでほしいと改めて思ったところです。

防災の関係では、防災に女性の視点を生かすという点は、まだ実質化していないと改めて思いました。少し前に参加したもりおか女性センターのフォトトークのお話でも、今日の菊池さんの話を聞いても、改めてこれから起こり得るたくさんの災害のときに、いかに女性の視点を生かして立ち向かっていくのかという点がまだ不十分ではないかと思います。県でも防災には、女性委員を確実に入れるようにと、実際に働きかけているとは思いますが、改めて、市町村のレベルでも、防災の計画をつくるときに女性の意見をしっかりと、聞くというような機会をつくってもらいたいと思いました。

最後の小山さんとの話し合いでは、女性が活躍していくためには、学ぶことの重要性について考えました。特に女性にはそのよう機会が少ないと思うので、つながりをつくりながら学ぶ機会を増やしていくことが大切ではないかと思います。女性社員が3人いて、話しやすく、いい商品ができるというお話が出ていたと思うので、女性だけが集まる企業化支援の女性塾があってもいいのではないかなという気はするのです。海外展開も考えているという希望も話していましたので、そういう方たちをどう育てて、次の岩手の産業を女性の視点で活性化していくのか、政策をぜひ県の方たちには考えていただきたいと思えます。新しい何か切り口をお願いします。岩手県はこの女性の専門委員をつくったくらいは県なわけですから、その先には女性塾のようなものをつくって、女性の活躍をするために仕組みをつくっていますといった打ち出しをしてもらえれば、いろいろなところから元気のいい女性が戻ってくるかもしれないという気が、今日の話聞いて思いました。これで終わりたいと思いますが、よろしいでしょうか。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長 ありがとうございます。

委員の皆様から貴重な意見をいただきました。もしまだ言い足りないことがあればいつでもおっしゃっていただければと思います。

では、本日の現地調査はこれをもちまして閉会とさせていただきます。

最後に、大槻復興局長から御挨拶を申し上げたいと思います。

○大槻復興局長 御挨拶というか、いろいろと委員の皆さんから、私どもに対するこう動いてくれないかという御要望もあったことなので、私も感じていることをお話しさせていただきます。

おがよしの社長は、ある意味非常に男女平等な人なので、女性を同じような戦力として

考えているのです。だから、そういった意味で、男女の性差は関係ない方だと私は理解しました。

おがよしの社長が言っている高卒からの就職にこだわっているのは、これは実は未来づくり機構でもよく出る話なのです。内陸にある千田精工の社長もよくおっしゃっているのだけれども、県内でいろんなすごいことをやっている企業があるけれども、その技術とかをしっかりと高校生に伝えていないと、ブランドだけでしゃべっているということを非常に不満に思っています。だから、県内でもすばらしい取組をしている会社はいっぱいあるので、それをしっかりと子供に教えてやらないといけません。イメージだけで東京に行ってしまうことは、何とかしたいなど。ずっと昔から言われているのですけれども、教育現場での産業教育を生かして行かなければならないのではないかと思います。

○菅原委員長 高校生からでは遅いと思います。地域を巻き込んで、小中学校から、保護者の方たちを巻き込んだ教育をしないと、高校生になって急にと言われても、もう目はそこに向けていないので、遅いと思います。

○大槻復興局長 そういった取組がある種必要なのだろうと思っています。もちろん一回出て戻ってくる方々に対して優しい地域というのはすごく大事なのですけれども、今の会社のシステム自体も、終身雇用中心になっているから、なかなか不利になってしまうのですよね。だんだん雇用形態が変わってくると、その中で一旦就職してしまうというのはあると思うので、その辺は私も去年まで看護師確保に非常に苦労したところなので、それはよくわかります。

あと、子育て支援について、若い人がいて、それで出産とか子育ての時期に一回辞めて、また一段落したときにもう一回就職するという、女性の労働力のM字カーブになっているという話です。大きな企業であれば、次世代育成支援というような格好で義務化されているのだけれども、おがよしの社長も中小企業という枠でやらせてもらわないと税制上問題があるという話もあったので、岩手県はそういう会社がほとんどなわけです。だから、そういう会社に福利厚生みたいな部分でフォローしていくのはどうしたらいいか。多分行政がそこに支援をする格好よりも、協働で託児施設をつくっていくとかということに対して、行政が支援するという格好が考えられる話なのかなと思います。

それから、釜石の菊池のどかさんの話でもあったのだけれども、これから策定する提言集の中で特に避難所、特に震災後の避難所での先進国型の避難所というのは考えなければならぬ話です。そういった中で、女性の視点というのは大事で、そういう部分で委員の皆さんから声を上げてほしいなと思います。こうすればよかった、あれが必要だったと。岩手医科大学の小川理事長は、震災後2日、3日の日に「粉ミルクを確保しろ」と言ったのです。こういう発想を男で出せるのはすごいことなのです。粉ミルクを確保しろと女性からそういう声を上げてほしいと。今日も菊池のどかさんがしゃべっていましたよね。赤ちゃんを抱えてということで、ミルクもなくてと。それは、備蓄品として粉ミルクを入れるべきだということを上げてほしいと思います。

女性でなければ気がつかないような話がいっぱいあるはずですよ。私もその当時は医療局の管理課長をやっていたので、看護師さんたちからの要望を聞けば、女性でなければわからないような話がいっぱい出てくるのです。それを公的にはできないけれども、では組合でそれをやったらどうだという話もしました。だから、そういう声をぜひ委員の皆様から

も上げてほしいなと思います。

それから、藤勇さんは、若い人たちというか、今はそれぞれの地方の企業から世界に発信ができる手段はあると。それをどう使って、どうしたら効果的かがわからないから、踏み込めないというのは一番の課題です。そういう部分を、例えばSNSではとにかく外に出せるのだけれども、それをどういう形でやったら一番効果があるのか、みんなに見てもらえるのかといった部分の連携が必要。それをうまく教えてあげるような場が必要です。それだったら若い人たちも結構聞きに来るのだと思うのです。そういったのを、直接商売につながるかどうかはわからないけれども、リテラシーをやってあげるのがいいのかなと思っていました。

みそ、しょうゆだけではなく、利益率の高いやつをやらないとだめなのです。いろんな人との話し合いの中でそういう話も出てくると思う。先ほど申し上げたINSの場とかに引っ張り出していくというのも必要なのかなと思ってしますので、そういう動きもやらせていただきたいなと思います。

なりわいの部分ではそういう話ですけれども、要するに女性専門委員会に、ぜひ私らの見えない視点でアドバイスをいただきたい。先進国型の避難所をつくっていかねばならない。そして、そのときの女性の視点というのをぜひよろしくお願ひしたいなと思います。

○菅原委員長 平賀さんのところでももう既につくってありますよね。

○平賀委員 避難所マニュアルというのをつくってホームページに上げてあるので、もしよかったらそこから出していただければ。ただ、あれは完璧なものではなくて、一応このぐらいは押さえておかないとというのを出しています。欧米型の進んだ避難所では、幾つかの家がテントになっているような避難所もありますよね。だから、プライバシーが完全に守られるような避難所にしているという。

○大槻復興局長 それこそ熊本地震とか台風19号の大水害のときみたいに、車中で暮らすというほうが良いという話にならないようにしなければいけないのですよね。そういうことですよね。

○平賀委員 ただ、東日本大震災のときも、赤ちゃんのいる親とか障がいのある子供の親は、車中で暮らしていました。みんなに迷惑をかけるからというような理由でした。

○大槻復興局長 泣きますからね。

○平賀委員 だから、泣く子供たちのいるところは教室を開放して、子供はここのお部屋でと開放したところもあるのですけれども、ほとんどの学校はだめなのです。体育館だけで、教室は開放してもらえなかった。だから、せめて家庭科室を開放してくれれば、赤ちゃんのものをつくって、そこで煮炊きができるからという話もあったのです。でも、それも学校長の許可がないとだめということで全くだめでした。

○大槻復興局長 大槻高校は、教室を全部開放していますよね。

○平賀委員 だから、校長の判断です。余計なことはしないというのが基本的な姿勢なのです。特に教育委員会はそういう力が強いのですよね。それで、本当に難しかったです。だから、私が見た釜石一中の避難所も、段ボールで仕切りをすることすらだめでした。それは、そのリーダーが「そんなものをするな」と言って、一括で入っていた段ボールを使わせなかったですから。だから、夜中に知らない人が隣に寝ていて、嫌だったという話を

いっぱい聞きました。だから、女の人が入っていくと、女の人にそういう愚痴をいっぱいこぼしてくれるのです。だから、避難所に女性への支援がいっぱい入らないと、そういう声は聞こえてきません。

○大槻復興局長　そういう部分を提言の中でも、特に発災から6カ月とか、皆さん忘れて
いるから、そこの部分を強く書かなければならないだろうと思っています。そういう部分
に関してアドバイスをいただけるよう、よろしくをお願いします。

○伊五澤復興推進課推進協働担当課長　それでは、これにて本日の進行は終了させていた
だきます。ありがとうございました。

　次回の女性委員会は、2月上旬ごろの開催を予定しておりますので、後ほど日程調整さ
せていただきます。それでは、本日はありがとうございました。